

書評

Fabrice Jambois

DELEUZE ET LA MORT: Chemins dans L'Anti-Œdipe

L'Harmattan, 2016, 254 頁

南匠真*

1. 本書の概観

DELEUZE ET LA MORT: Chemins dans L'Anti-Œdipe は、Jean-Christophe Goddard の指導の下 Fabrice Jambois によって 2013 年にトゥールーズ大学ジャン・ジョレス校に提出された博士論文「ヘーゲル主義とスキゾ分析: ジル・ドゥルーズの哲学における死の観念と唯物論的精神医学の形成」の改訂版である。Fabrice Jambois は現在フランスの国民教育・青少年省に勤務している。

本書を貫く大きな目的は、1972 年に刊行されたドゥルーズ＝ガタリの著作『アンチ・オイディプス』の「スキゾ分析」(schizo-analyse) の読解であると言えるだろう。そして本書は三つのテーマに沿って議論を展開する。まずは、「課題」(tâche) と銘打たれていたにもかかわらずその後の著作で発展させられることのなかった『アンチ・オイディプス』のスキゾ分析がいかなるものであるのかを検討することである (Jambois 2016:11-12)。次に『アンチ・オイディプス』における死のテーマについてである (Jambois 2016:12-14)。最後に、『アンチ・オイディプス』の欲望的生産の議論におけるヘーゲル的な弁証法的図式の重要性についてである (Jambois 2016:14-15)。

この三つのテーマに関係する、『アンチ・オイディプス』の精神分析解釈に関する議論を、様々な精神分析家の文献を援用しつつ展開するという仕方では本書は進行する。本書は全十五章から構成されているが、ここで各章の概要を紹介する。まずドゥルーズのスピノザ主義にもかかわらず『アンチ・オイディプス』に読み取れるヘーゲル主義について論じられ (第一章)、次に『アンチ・オイディプス』の重要概念である「器官なき身体」(corps sans organes) をメタサイコロジーの観点から解釈される (第二章)。フロイトの

* 大阪大学大学院 人間科学研究科 共生の人間学 博士前期課程
(m.shomah8@gmail.com)

死の欲動がドゥルーズ＝ガタリによって「機械状の死の欲動」(pulsion de mort machinique)へと改鑄されたかが論じられ(第三章)、そこから器官なき身体が含意するとされる「原－マゾヒズム」(archi-masochisme)へと主題が移り(第四章)、ここで挿入的に『アンチ・オイディプス』の「欲望的生産」(production désirante)に見られる「生産する働きと生産物の同一性」(identité du produire et du produit)がドゥルーズ哲学とヘーゲル哲学の観点から三通りに解釈される(第五章)。『アンチ・オイディプス』の「流れ」(flux)概念がメタサイコロジーの観点から論じられ(第六章)、無意識の核による心的世界の構築とヘーゲル的な弁証法との連関が論じられ(第七章)、ジャック・ラカンの精神分析理論に由来する対象 a の概念をドゥルーズ＝ガタリがいかに改変したかが論じられる(第八章)。ここから死のテーマが中心的存在となり、ドゥルーズ＝ガタリによる死の欲動の批判が再び取り上げられ(第九章)、『アンチ・オイディプス』の死についての議論が「強度」(intensité)概念から解釈される(第十章)。次に「分裂症」(schizophrénie)的な主体の経験のライプニッツ的解釈(第十一章)と『アンチ・オイディプス』の資本主義批判(第十二章)が検討されたのちに、『アンチ・オイディプス』における分裂症が「人工的」(artificiel)であるということが「転移」(transfert)と共に論じられる(第十三章)。ここからスキゾ分析がどのような治療であるかが主題になり、フロイト的な神経症的転移の批判と『アンチ・オイディプス』における精神病的転移が論じられ(第十四章)、スキゾ分析における治療が理論的にいかなるものであるかが描き出される(第十五章)。結論では死の間際にある人間の心的な動きがスキゾ分析と重ねられて論じられる。

本稿ではこれらの様々な主題のすべてを取り上げることはできないが、その中でもとくに重要であると思われる器官なき身体に注目する。なぜなら、器官なき身体は本書の三つの主題のすべてにおいて欠かすことのできない位置を占めているからである。精神分析批判であり新たな治療の手段であるスキゾ分析においても、『アンチ・オイディプス』で論じられる経験的な死に関しても、欲望的生産に否定性をもたらす弁証法を作動させるというその機能に関しても、器官なき身体は中心的な役割を担っている。Jamboisは器官なき身体をフロイトのメタサイコロジーにおける経済論的観点から解釈したが、その議論の詳細について本稿次節で検討する。第三節でこの器官なき身体の議論の批判すべき点について指摘する。

2. 器官なき身体に関する議論の検討

Jambois は器官なき身体の概念の定義についてドゥルーズ＝ガタリの『千のプラトー』の「それは観念や概念ではない」(Deleuze=Guattari 1980:186/ドゥルーズ＝ガタリ 2010:上 307)。という一節を引用し、そして次のように続ける。

経験可能なものの外部にある限界という概念でもなく、根本的に未分化な抽象的観念でもなく、CsO〔器官なき身体:筆者注〕は、むしろあらゆる概念化へ抵抗し、あらゆる概念化の外部を記すような経験を示している。CsO は確かに限界ではあるが、実際に生きられている限界である。この限界は、まさにそのような経験によって特異性の内に構成される主体を別の場所に運び、押しやり、移動させる。(Jambois 2016:29)

器官なき身体をこのように規定した上で Jambois は、器官なき身体をドゥルーズ＝ガタリが卵として考えているというアナロジーに言及し、このアナロジーが「幻想あるいは表象、演劇の観点から精神分析的に CsO を解釈することを不可能にする」(Jambois 2016:30) と論じる。器官なき身体を卵と考えることは「CsO にエネルギー的な意味を与える」(Jambois 2016:30) のである。そうして Jambois は器官なき身体をメタサイコロジーにおける経済論的観点から論じる。

Jambois が引き合いに出すのは「自体愛」(auto-érotisme) から「第一次ナルシズム」(narcissisme primaire) への移行である。

自体愛とは、性の部分欲動の振る舞いが統合されておらず、「快の増大」を自分だけの身体の上で獲得するために「それぞれが自分自身で働く」という段階である。自体愛は、統合された身体のイメージによってゆがめられることなく、卵のモデルを示す。この卵のモデルは自己満足と自己への中心化によって特徴づけられたフロイトの基本的な心的モデルに取って代わるものである。〔中略〕自体愛において身体は外的世界と未分化なままであり、独自の自我の形成の兆しは見られない。反対に、第一次ナルシズムへの移行において現れるものが、まさに独自で、全体的で、統合された自我である。自我は分離した欲動を一つのリビド

一としてふるまわせるだろう。〔中略〕 自体愛の身体は性感帯への分割に先行し、「未分化の巨大な対象」としての「器官なき身体」に対応する。(Jambois 2016:33)

ここで Jambois は第一次ナルシシズムの自我に対立するものとして器官なき身体を考えている。さらに彼は、François Villa の議論を援用しつつ、自体愛と第一次ナルシシズムの間に「心気症的な期間」(moment hypocondriaque) (Jambois 2016:34) を想定する。それは、「極度の緊張に捉えられた身体が自らを満たす欲動的成分を放出するプロセスに入る」(Jambois 2016:34) という期間である。しかし、生きている限り欲動が身体の内から消えることはないため、このプロセスは失敗し、

身体縁に欲動的興奮が投射されることになる。こうして身体に〔身体的ではなく:筆者注〕 心理的な性格をもった性感帯が形成される。ナルシシズムにおける〔リビドー:筆者注〕 鬱積が自体愛における鬱積の後に続くのである。(Jambois 2016:34)

自体愛におけるリビドーの鬱積とは、つまり、自体愛の身体は自分の身体のみで欲動を満足させようとするが、これには限界があるということである。人間は外界から栄養を摂取しなければ生きていけないからである。それゆえ自体愛の身体には行き場を失ったエネルギーが鬱積することになり、それが不快の放出に繋がる。不快を外へと投射することは、外界から快を得ることもである。「自分の身体の内側では得られない満足を外部から得る」ことを目的とするこのような試みは「仮足を伸ばした微小生物 animalcule qui a〔原文は à〕 émis des pseudopodes」(Jambois 2016:33) とのアナロジーで語られる。そして仮足は、「放出すべき欲動への抵抗が現れ、またその抵抗によって心理的な意味そのもの、特殊で序列的な諸性感帯への身体の分割が生じる」(Jambois 2016:35) ような場所でもある。

欲動が身体の表面に固定されることそのものとしての性感帯が生じることで消えてしまう仮足は、リビドーがある器官に集中することによって生じる心気症と同じ機制によって生じる仮の器官、あるいは身体であると言える。そこには

強度の感覚が集中しており、心気症的な器官は自体愛と第一次ナル

シズムの転換点にあって自足の状態を維持する。そのような自足の状態において、欲動の排出路は身体の外ではなく、非性器的身体の全体として性感的な身体の表面に求められるが、これは身体が性感帯へと寸断される以前のことである。〔中略〕器官なき身体の断片化は、仮足に開いた開口部における内部と外部の交流が外的な助力と遭遇するときには起こらない。(Jambois 2016:35-6)

心気症的な器官は、寸断されていると同時に性器によって序列化されながら自我の統一性を帯びる性感帯に対立する仕方ですべて的な身体に生じる(全体的な身体であるのだからここで身体と器官の区別は曖昧である)。これはつまり、心気症的な器官は部分欲動が働いている自体愛とも厳密には異なるということである。自体愛の内部での鬱積から性感帯による自我の発生までの間にある、必ずや分割されてしまう主体以前の全体性の形成、これが心気症的な器官である。

このような器官は「何らかの器官」(*organe quelconque*) (Jambois 2016:37)とも呼ばれる。ドゥルーズ＝ガタリは、フロイトが性器から性感性を引き出し、それをほかのあらゆる身体部分に適用した操作をさらに先鋭化させた(Jambois 2016:38)。心気症的な器官は性器を参照せずともそれ自体が欲動のはけ口であり、その役割を果たす限りではどのような形態をも取りうるのである。そして、これまで見てきたような心気症的な器官の発生の過程を逆向きに辿るなら、「器官なき身体の設定は身体に備わった機能を解体し、有機体を分解することを含意する」(Jambois 2016:41)。さらに「未規定な器官としての器官なき身体と、それに応じて心気症的な器官が変化を被るような外的な力からの作用との連関をドゥルーズが維持している」(Jambois 2016:40)と論じられる。このことは、心気症的な器官の試みが失敗し、外的な助力によって器官なき身体が断片化するという事態に相当するだろう。つまり、性感帯によって分割されると同時に自我の統一性を与えられた有機体は「外的刺激に対する反応の手段の全体以外の何物でもない」(Jambois 2016:41)。

器官なき身体は、機能が固定された通常の器官(性感帯的な器官の序列化を経た後の器官)とは異なり、「脱機能化した身体、その単純な現前に還元された身体、解剖的というより原子的であるような身体」(Jambois 2016:42)

なのである。Jambois はこの器官なき身体の脱機能性に「部分対象」(objet partiel) の多機能性を見出す。部分対象の自由な結合は器官なき身体の脱機能性、あるいは可塑性と同一視され、「部分対象は流体的な連続体の全体に対する強度的部分に対応し、この部分と区別されない」(Jambois 2016:42) とされる。こうして Jambois は、器官なき身体と部分対象の関係を、内部からの欲動に満たされた心気症的な器官の外的刺激に対する脱機能化された反応として解釈し、欲動の経済論的枠組みの中で捉えるのである。

3. 本書に対する批判

以上で検討してきた器官なき身体の議論は、本書第二章の題名通り(「器官なき身体の発生(genèse)と心気症的停滞」、メタサイコロジーにおける経済論的枠組みを用いて器官なき身体の発生を論じるものであると言えるだろう。しかしながら、この「発生」(genèse)という観点によって Jambois は『アンチ・オイディプス』の議論を捉え損ねてしまっているのではないだろうか。というのも、『アンチ・オイディプス』において器官なき身体は「発生してきたものではなくて始めからあったもの」(Deleuze=Guattari 1972:14/ドゥルーズ=ガタリ 2006:上26)であり、「自分自身の自動生産を、自分自身による発生を示している」(Deleuze=Guattari 1972:21/ドゥルーズ=ガタリ 2006:上38)と言われるからである。器官なき身体は、ドゥルーズが『意味の論理学』(1969)でまさに物体から発生するものとして「動的発生」(genèse dynamique)に位置付けた概念であるが、その構図を『アンチ・オイディプス』にも読み込むことは困難であるように思われる。『アンチ・オイディプス』をガタリとともに執筆した後のドゥルーズからすれば『意味の論理学』における表面と深層という二つの存在論的次元の対立は『意味の論理学』の失敗として考えられたのであるが、表面はまさに動的発生を経て深層から発生するものであった。

発生という議論の構図だけではなく、器官なき身体概念そのものの中にも Jambois は『アンチ・オイディプス』の器官なき身体には本来相容れない要素を持ち込んでいるように思われる。本書の器官なき身体の発生の議論は、器官なき身体と部分対象の関係を、原初的な主体とその外界という構図

に当てはめているが、このことは器官なき身体と部分対象の他に何も部品を持たないはずの欲望的生産に、外的刺激という仕方で別の要素を加えてしまっている。心気症的な器官が、『アンチ・オイディプス』における器官なき身体と部分対象との協働による欲望的生産を表しているなら、外的刺激はそのどちらにも相当しない要素であると言える。このことに関して、『意味の論理学』の動的発生において幼児が妄想分裂態勢を抜け出すために高所を必要としたことを思い出すことができるだろう。欲望的生産の過程そのものにそのような外部の要素を加えることは欲望的生産の理論からすれば不必要な操作である。

また文献学的な観点からの批判としては、Jambois は自らの議論によって導出された心気症的な器官を『アンチ・オイディプス』の器官なき身体と同一視しているが、このようにして導出された器官なき身体は実際には『アンチ・オイディプス』の器官なき身体概念に相当するとはいいがたいのではないか、というものが考えられる。心気症的な器官という概念は François Villa の論文「器官なき身体と心気症的器官」から採られたものであるが、この論文では『アンチ・オイディプス』の器官なき身体概念を検討していないのである。Jambois (2016:32) はこのことを認識しており、「François Villa はその論文の中で『アンチ・オイディプス』にも『千のプラトー』にも決して言及しない」と述べている。Villa はドゥルーズ単著の器官なき身体概念しか扱っていないのである。このことは、器官なき身体概念を検討する上で大きな問題である。というのも、『アンチ・オイディプス』に登場する器官なき身体という概念は、ドゥルーズの『意味の論理学』に由来する概念であると思われるが、『意味の論理学』の器官なき身体と『アンチ・オイディプス』のそれとでは内実が根本的に異なり、また『アンチ・オイディプス』以降のドゥルーズ単著における器官なき身体もガタリ哲学の影響を受けて『意味の論理学』とは異なったものになっているという事情があるからである。つまり『アンチ・オイディプス』の器官なき身体概念はガタリとの共同作業によって作られた概念であるが、それを検討する際にドゥルーズ単著の器官なき身体概念しか検討していない Villa の論考のみに依拠するのは、共著であるはずの『アンチ・オイディプス』におけるガタリ哲学の影響を軽視しているのである。

本書はこのように、その議論全体を貫く器官なき身体概念の解釈に関し

て『アンチ・オイディプス』の欲望的生産とは相容れない要素を持ち込んでしまっている。それゆえ本書は、「この著作を読み解くための包括的な入門」(Jambois 2016:41)を自称するものの、そのような役割を果たしているかどうかは検討の余地があるだろう。しかしながら、各章の個々の議論に注目するならば、本書には様々な興味深いアイデアがちりばめられている。特に、欲望的生産に死の経験を見出すドゥルーズ＝ガタリの議論にヘーゲルの弁証法を見出すという発想は、ヘーゲルを敵視し続けたドゥルーズ(＝ガタリ)哲学の解釈に新たな観点をもたらすだろうが、それはヘーゲル哲学に依拠して『意味の論理学』を評価し『アンチ・オイディプス』を非難するスラヴォイ・ジジエックのような論者とは全く異なる仕方によってである。さらにはジャン・ウリを介した対象 a 概念の解釈や、スキゾ分析と非神経症的な転移の関係などの論点があるが、それらは今後『アンチ・オイディプス』にとどまらずドゥルーズやガタリの哲学のさらに広い文脈において検討されるべき射程を持っているだろう。

参考文献

- Deleuze, Gilles. Guattari, Félix. 1972. *L'Anti-Œdipe. Capitalisme et schizophrénie*. Paris: Minuit. (2006『アンチ・オイディプス』(上)(下) 宇野邦一訳、東京：河出書房新社)
- Deleuze, Gilles. Guattari, Félix. 1980. *Mille plateaux. Capitalisme et schizophrénie 2*. Paris: Minuit. (2010『千のプラトー』(上)(中)(下) 宇野邦一他訳、東京：河出書房新社)